

ひゃくづかすみよし
富山市百塚住吉遺跡
発掘調査報告書

- 市道宮尾 6 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2001

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市宮尾3270-4番地外に所在する百塚住吉遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、富山市建設部道路課が行う市道宮尾6号線道路改良工事に伴う本発掘調査である。
- 3 調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指導・監理の下で株式会社バスコが担当した。
- 4 調査期間 現地調査 平成13年1月10日～平成13年2月19日
出土品整理 平成13年3月1日～平成13年3月20日
- 5 調査は、株式会社バスコ 小畠直輝、大池 學が担当した。
- 6 調査にあたり、地元宮尾町内をはじめ応宰工業株式会社、社団法人小杉町シルバー人材センターのご協力を得た。記して謝意を表します。
- 7 発掘調査参加者は次の通りである。
大杉正夫、長井礼子、長谷川つじ、林えみ子、松林敦子
- 8 出土遺物の整理、トレイスについては伊東朋子、長尾愛、中西香代、野呂和子が行った。
- 9 遺跡名の略号はHSで、遺物の注記には略号を使用した。また遺構名略号はSB：掘立柱建物、SD：溝、SK：土坑、P：ピットとする。
- 10 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」による。
11 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 12 本書の編集、執筆は小畠が行った。但し、IIの「1.調査に至るまで」については富山市教育委員会埋蔵文化財センター主任学芸員古川知明が執筆した。

目　　次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯	4
III 調査の成果	7
IV まとめ	16
写真図版	18
報告書抄録	23

I 遺跡の位置と環境

百塚住吉遺跡は富山市宮尾地内に所在し、呉羽山丘陵から北に延びる神通川下流左岸の河岸段丘上に位置する（図1）。

呉羽山丘陵は富山平野のほぼ中央に位置し、富山県域を二分する形で東西から北東に延びている。最高点は丘陵のほぼ中央、城山で標高は145.3mである。西側は緩斜面となっているのに対して、東側は急崖状を呈し、神通川とその支流である井田川が沿うように流れている。この丘陵を境にして東側を呉東、西側を呉西と呼び、自然や文化の様相にも違いが認められるという。一帯には旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多くあり、富山市域でも分布密度が高い地域となっている。

縄文時代の代表的な遺跡として、北代遺跡（国指定史跡）がある。中期中葉～後葉を主体とする集落跡で、多数の竪穴住居跡や掘立柱建物が検出されている。また、北代加茂下Ⅲ遺跡では中期前葉～中葉にかけての集落跡が確認されている。後期から晩期にかけては、長岡杉林遺跡で後期の竪穴住居跡が1軒確認されているが、分布密度も疎となるようである。

弥生時代から古墳時代にかけては板坂古墳群や丘陵南西端に杉谷古墳群をはじめとする墳墓が築造される。四隅突出型方墳や前方後方墳を含むいわゆる出現期古墳であるが、これら方形を主体とする墳墓は呉東側に集中し、円形を主体とする墳墓は呉西地域に分布する傾向が指摘されている。墳墓を築造した集団の集落跡は現在のところ不明であるが、百塚住吉D遺跡では該期の土器が多く出土し、碧玉製の細形管玉も出土している。また、百塚住吉B遺跡では古墳時代後期の須恵器短頸壺や7世紀後半の須恵器蓋などとともに碧玉製の太形管玉も採集されていることから、本遺跡周辺に古墳や集落跡の存在が推定される。



図1 百塚住吉遺跡調査地点位置図(S=1/50,000)

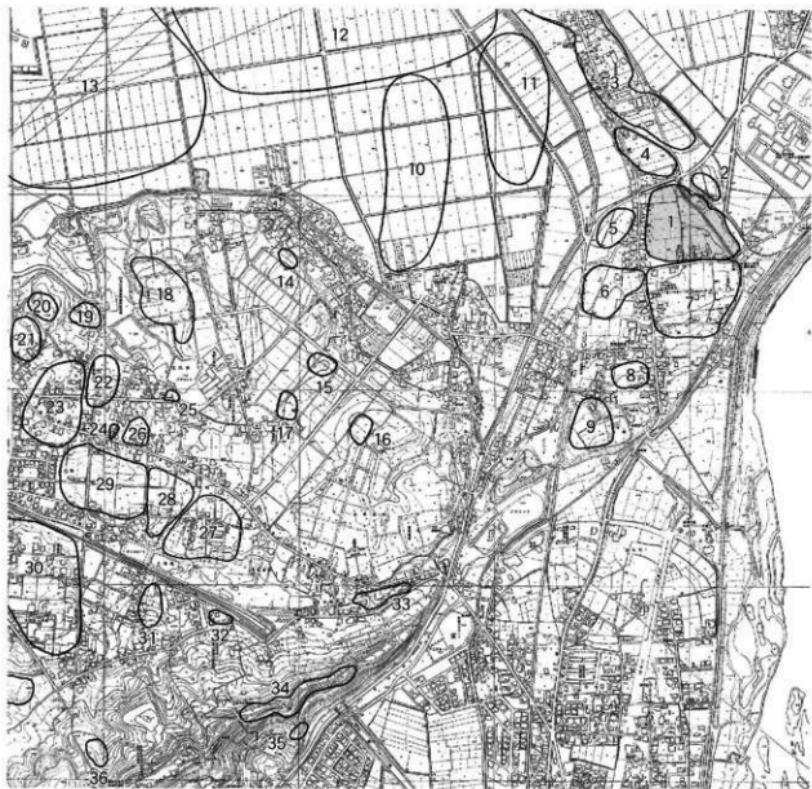


図2 周辺の遺跡 (S = 1 / 12,500)

NO	遺跡名	種別	時代	NO	遺跡名	種別	時代
1	百塚住吉	集落跡	縄文(晚期)・弥生・古墳・奈良・平安	19	北代加茂下I	散布地	縄文(中期)
2	百塚住吉B	集落跡	縄文・云生・古墳・奈良・平安	20	北代加茂下II	散布地	平安
3	百塚住吉D	散布地・集落跡	縄文(後～前期)・弥生・古墳・奈良・平安・中世	21	北代中谷	散布地	縄文
4	百塚住吉C	散布地	縄文・奈良・平安	22	北代加茂神社	散布地	縄文
5	百塚住吉E	散布地	奈良・平安	23	北代加茂下III	集落跡	縄文(中～晚期)・奈良・平安
6	百塚B	散布地	縄文(中～前期)	24	北代大畠田	散布地	縄文
7	百塚	散布地	縄文(後～前期)・奈良・平安	25	北代小学校西	散布地	縄文
8	百塚柴原	散布地	奈良・平安	26	北代加茂下芦	散布地	奈良・平安
9	八ヶ山	散布地	縄文(中～前期)・弥生(後期)	27	真岡移軸	集落跡	縄文(早～中期)・弥生(後期)・古墳(中期)・奈良・平安
10	八ヶ山C	散布地	縄文(中期)・白鳳・奈良・平安・中世・近世	28	北代東	集落跡	縄文(中期)・奈良・平安
11	八ヶ山B	散布地	奈良・平安・中世・近世	29	北代	集落跡	旧石器・縄文(早～後期)・弥生・奈良・平安
12	八ヶ山A	散布地	縄文(後～中期)・古墳・奈良・平安・中世・近世	30	奥羽富田町	集落跡	縄文(晚期)・奈良・平安
13	八町II	散布地	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	31	北代南田瀬	散布地	縄文・奈良・平安
14	八町D	散布地	縄文(晚期)・中世	32	北代一万余	散布地	奈良・平安
15	八町A	散布地	縄文(中期)	33	長岡所	散布地	奈良・平安
16	八町B	散布地	縄文(晚期)	34	妙石谷古墳群	古墳	古墳(前期)
17	八町C	散布地	縄文(中期)	35	長慶寺古墳	古墳?	古墳
18	八町	散布地	縄文(中～前期)	36	北代平野	散布地	縄文

表1 百塚住吉遺跡周辺の遺跡

奈良・平安時代には遺跡数が増加し、長岡杉林遺跡、百塚住吉D遺跡、北代遺跡などで集落跡が確認されている。長岡杉林遺跡は昭和61(1986)年に発掘調査が行われ、8世紀前半の掘立柱建物3棟、カマドを有する堅穴住居跡2軒、鍛冶工房、9世紀末~10世紀の掘立柱建物3棟、溝2条、井戸1基などが確認されている。平安時代に属するSB05は、周辺から縁軸陶器(椀・火舎)、灰釉陶器(椀)や瓦塔など仏教的色彩の強い遺物が出土し、祀堂の存在が推定されている。

百塚住吉D遺跡は平成8(1996)年に発掘調査が行われ、奈良時代を主体とした掘立柱建物・溝・土坑などが確認されている。また北代遺跡では8世紀末~9世紀半ば頃の堅穴住居跡7軒、掘立柱建物などが検出されている。

近世に入ると富山藩初代藩主であった前田利次が、富山城の出城として百塚山に百塚城の築城を計画したが、資金潤沢の面から断念したとされる。周辺には屋敷割・蔵屋敷などが地名として残された。また遺跡の西側には、牛ヶ首用水が流れる。寛永年間に新田開発として掘削された人用水で、のちの生産高から俗に四万石用水ともいわれた。

近代に入ると遺跡の周辺は、桑畠として利用されていたらしく、調査前の状況は道路で周辺は野菜畠であった。

参考文献

- 藤田富士夫 1983 「日本の古代遺跡 13 富山」
- 富山考古学会 1986 駒見和夫「富山県における堅穴住居と掘立柱建物住居－奈良・平安時代集落研究の一覧点」「大境 第10号」
- 富山市教育委員会 1987 「長岡杉林遺跡－富山県富山市長岡杉林遺跡発掘調査報告書－」
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 「シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題」
- 平凡社 1994 「富山県の地名（日本歴史地名体系16）」
- 鹿島昌也 1997 「富山市の遺跡9 百塚住吉D遺跡」「富山市考古資料館報 N.O.3.1」
- 富山市考古資料館
- 富山市教育委員会 1999 「史跡北代遺跡ふるさと歴史の広場整備事業報告書」
- 富山考古学会 1999 富山考古学会創立50周年記念シンポジウム『富山平野の出現期古墳《発表要旨・資料集》』

II 調査の経緯

1. 調査に至るまで

百塚住吉遺跡は、昭和51年3月富山市教委発行の「富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図」に初めて登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることになった。

(No41 百塚住吉遺跡 包含地 土師器出土)

平成9年、富山市建設部道路課が市道宮尾6号線道路改良工事を計画し、路盤工事に着手したところ、掘削面において遺構及び古墳時代の土器の出土が認められたため掘削を中止し、その取扱いについて協議を行った。工事内容から判断し270m²の発掘調査の必要性を認めたが、市教委がただちに実施できる態勢にはなかったため、いったん埋戻して農道として供用することとした。

平成12年に至り、地元宮尾地区と道路課において調査の実施時期について調整し、11月以降畑作の少なくなる冬期に実施することとなった。

調査の実施にあたっては、市教委において十分な調査態勢がとれなかつたため、民間委託を活用して行うこととし、市教委の監理のもと株式会社バスコが発掘調査を担当した。

現地調査は平成13年1月10日に着手し、同年2月19日に完了した。延べ32日間を要した。出土品整理は平成13年3月1日に着手し、同年3月20日に完了した。

2. 調査の経過

発掘調査は平成13年1月10日に富山市教育委員会、富山市市役所道路課立会いのもと調査区の設定をし、翌11日から2日間にわたって表土掘削を行った。表土掘削後、大雪に見舞われ調査区内が埋没する状況であった。その後、調査区への搬入路の確保、調査区内の除雪作業を行い同月22日から本調査を開始した。度重なる積雪のため思うように調査は進行しなかつたが、2月15日にラジコンヘリによる空撮を行った。その後補足調査、後片付けを行い、2月19日をもって現地でのすべての作業を終了した。

調査日誌抜粋

- 1月11日 調査区南側より表土掘削開始。試掘調査によって確認されていた溝（SD01）を確認。
- 15日 過去からの積雪（約40cm）により調査区内埋没する。
- 26日 SD07～09を確認。溝に埋まれた地山（遺構検出面）から遺物細片が出土する。
- 2月15日 前日に雪が舞ったが、久しぶりの晴天となる。東方に立山連峰がくっきりと見える。ラジコンヘリによる空中写真。
- 19日 基本層序ほか遺構断面図作成。補足調査。
- 21日 調査事務所（プレハブ）撤去、後片付け。

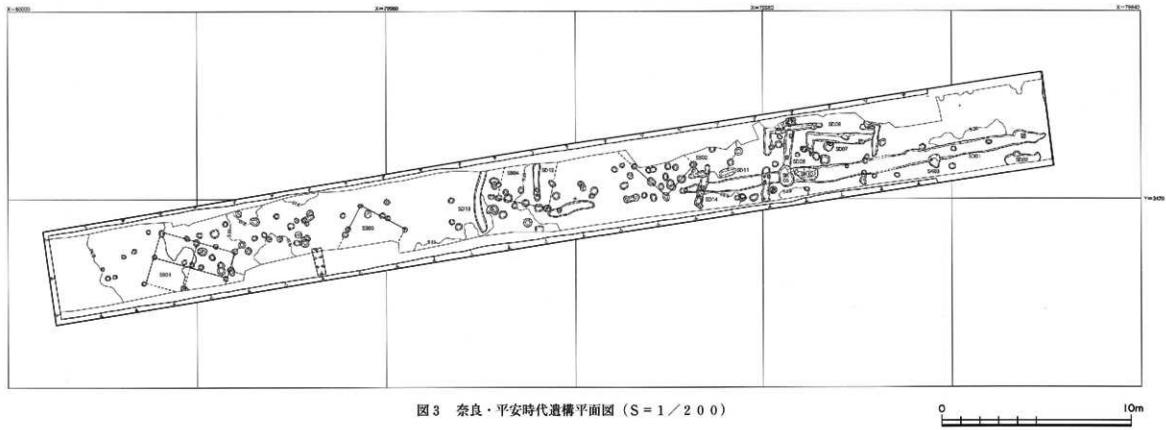


図3 奈良・平安時代遺構平面図 ($S = 1/200$)

III 調査の成果

1. 基本層序（図4）

発掘調査時には調査区に隣接して、東西両側にU字溝が設置されており、そのため調査区内も壁面近くが、その際の掘り山によって搅乱をうけていた。さらにその内側も耕作によるものと思われる搅乱をうけており、後述するSB01南側からSB03西側にかけてはかなり広範囲な搅乱をうけている状況であった。また耕作や路盤工事により包含層もかなり削平されているものと思われ、出土遺物は少なかった。

基本的には現道路面下が、旧耕作土（7.5YR4/2）、包含層（7.5YR3/2）、遺構検出面（2.5Y7/6）となる。遺構検出面は黄色火山灰土である。なお、発掘調査終了後、層位確認のため調査区南端に約2m×2mの坪掘りを実施した。その結果、現道路面から約1m（標高約8.7m）付近で水つきとなり、遺物、文化層ともに確認されなかった。遺構埋土は黒褐色土を基本とし、地山を粒状に少量含むもの、ブロック状に多く含むものとに分類することも可能と思われるが、顕著な差はみられなかった。

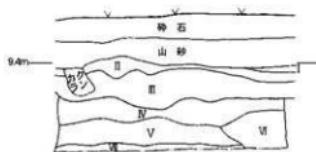


図4 基本層序（調査区南壁、S=1/40）

- 第Ⅰ層 黒褐色土 粘性ややあり、縮まりあり。0.5mm位の白色粒をごく微量に含む、1mm位の黒色土粒を微量に含む。旧耕作土。
- 第Ⅱ層 黒褐色土 粘性ややあり縮まりあり。2mm位の炭化物をごく微量に含み、暗茶褐色粒を少量含む。白色微粒子をごく微量に含む。奈良・平安時代を主体とする遺物包含層。
- 第Ⅲ層 黄褐色土 喧黄褐色。粘性弱く縮まりややあり。砂質層で1-2mm位の黒色粒を多く含む。10-20mmの粘質粒を多く含む。遺構検出面。
- 第Ⅳ層 明淡黄褐色土 粘性ややあり縮まりやや弱い。砂質層で1-2mm位の黒色粒を多く含む。10-20mmの粘質粒を少量含む。
- 第Ⅴ層 明淡黄褐色土 粘性ややあり縮まりやや弱い。砂質層で1-2mm位の黒色粒を少量含む。10-20mmの粘質粒を微量に含む。5mm位の黄褐色粒（状態）を多量に含む。
- 第Ⅵ層 暗淡黄褐色土 粘性ややあり縮まりやや弱い。砂質層で1-2mm位の黒色粒を少量化す。10-20mmの粘質粒を微量に含む。5mm位の黄褐色粒（状態）を多量に含む。
- 第Ⅶ層 明灰褐色土 粘性あり縮まり弱い。ローム質の砂質層で1-2mm位の黒色粒をごく微量に含む。5mm位の黄褐色粒（状態）を多量に含む。

2. 確認された遺構

概要

確認された遺構としては掘立柱建物4棟、溝9条、土坑3基がある（図3）。出土遺物が少ないため、明確な時期は不明であるが遺物の出土状況や埋土から奈良・平安時代として取り扱う。また、調査区南東側（S D 0 1 東）、S B 0 2 北側では円形や方形を呈するピット状の遺構が確認された。一部掘削した範囲では直径約30～50cm、深さは数cmと浅く、埋土から近・現代の耕作に伴うものと思われる。

掘立柱建物

1号掘立柱建物（S B 0 1、図5）

調査区北寄りで検出された2間×2間の南北棟の建物であるが、さらに西側に延びるものと思われる。桁行4m、梁行2.8m、平面積は11.2m²で、建物の主軸方位はN-15°-Eである。柱間は桁行方向が2mの等間、梁行方向も1.4mの等間になるものと思われる。柱掘形は円形ないしは梢円形を呈し、直径20～30cmである。柱痕は確認されなかった。梁行方向の北から2列目、3列目の西隅の柱穴は搅乱及び調査区外となるため不明である。当初は桁行、梁行とともに2.8mとなる2間×2間の建物

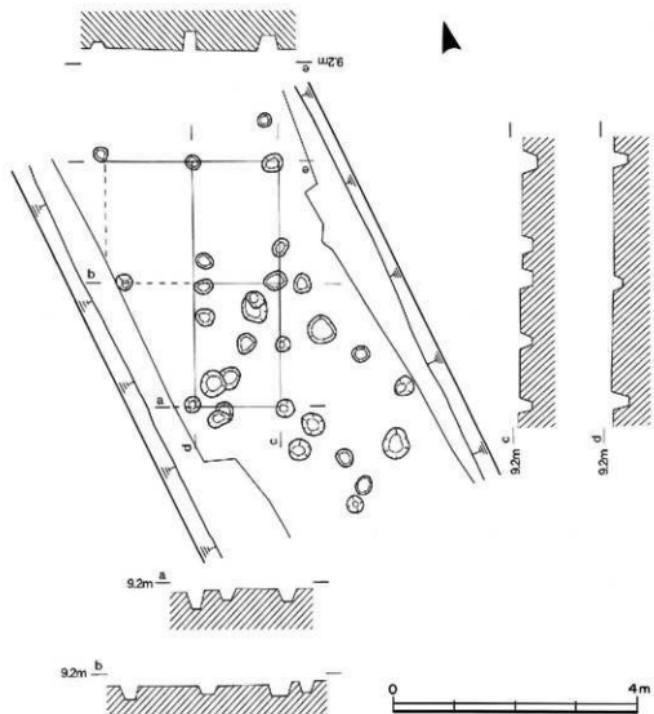


図5 S B 0 1 遺構平面図 (S = 1 / 80)

を想定したが南西の柱穴を欠き、再精査によって南東隅の柱穴を確認したものである。主軸方位からややはざれるものの中央に柱穴をもち、総柱式建物になると思われる。柱穴からの出土遺物はなかった。周辺のピットからは1の土師器が出土している。推定底径6.4cmの小型壺と思われる。調整は体部下半ヘラケズリである。

また後述するSB03との間には直径約30~40cm、深さ30~40cm程のピットが確認され、柱穴の可能性が考えられるが、今回の調査では規模、構造等は明確にできなかった。

2号掘立柱建物 (SB02、図6)

SB04の南方に位置し、隣接してSD14がある。桁行、梁行ともに2.3m、平面積4.6m²の2×2間の建物である。主軸方位はN-40°-Eを示す。南北棟と仮定すると、柱間は桁行方向が北から1.3m、1.0m、梁行方向が東から1.0m、1.3mとなる。柱掘形は直径約35~45cmのほぼ円形を呈し、深さは約30cmと安定している。柱痕は確認されなかった。確認範囲では小規模な建物となり東方に延びるものと考えられるが、攪乱及び調査区外となるため正確な規模は不明である。遺物はP1、2から土師器が出土しているが小片のため器種、時期等は不明である。

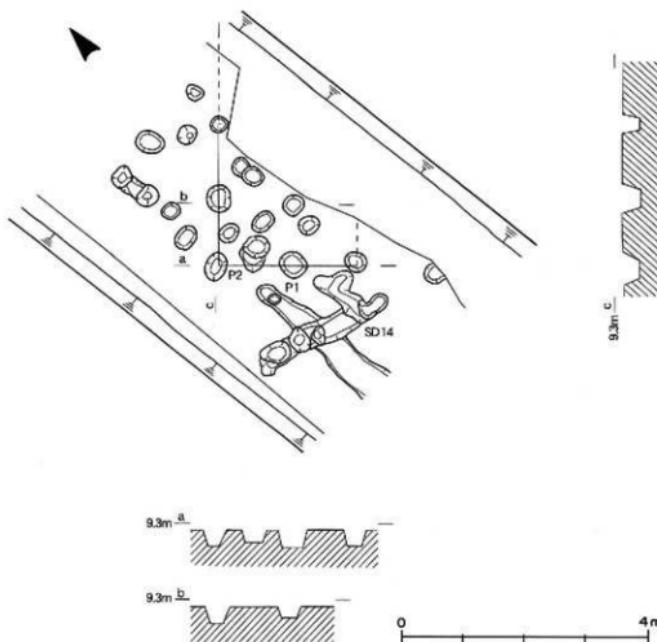


図6 SB02 遺構平面図 (S=1/80)

3号掘立柱建物 (SB03、図7)

SB01とSB04の間に位置する2間×1間の南北棟の建物である。西側にさらに延びるものと思われるが、攪乱を大きくうけており不明である。建物の主軸方位はN-30°-Eを示し、桁行2.65m、梁行約1.4m、面積は3.71m²である。桁行方向の柱間は北から1.25m、1.4mとなる。柱掘形はほぼ円形を呈し、直径約20~30cmで、深さは北東隅がやや浅い。柱痕は確認されなかった。遺物はP1から2の土師器甕が出土している。調整は内外面ハケメである。

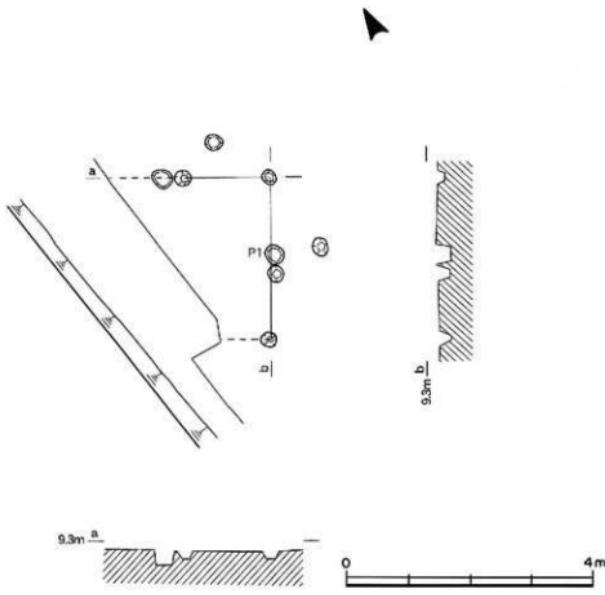


図7 SB03遺構平面図 (S=1/80)

4号掘立柱建物 (SB04、図8)

SD13南側に位置する2間×1間の南北棟の建物で、SD12と重なる。桁行2.75m、梁行約1.4m、面積は約3.85m²である。東側にさらに延びるものと思われるが、攪乱及び調査区外となるため不明である。主軸方位はN-13°-Eを示す。桁行方向の柱間は北から1.5m、1.25mとなる。柱掘形は円形、梢円形を呈し、直径20~30cmである。柱痕は確認されなかった。また、柱穴から遺物の出土はなかった。周辺のピットから土師器壺蓋が出土している。

また周辺には直徑約40cm、深さ約30~50cm程の柱穴と考えられるピットがあり、またSD12が位置することから他にも建物があった可能性も考えられるが今回の調査では規模、構造等は明らかにできなかった。

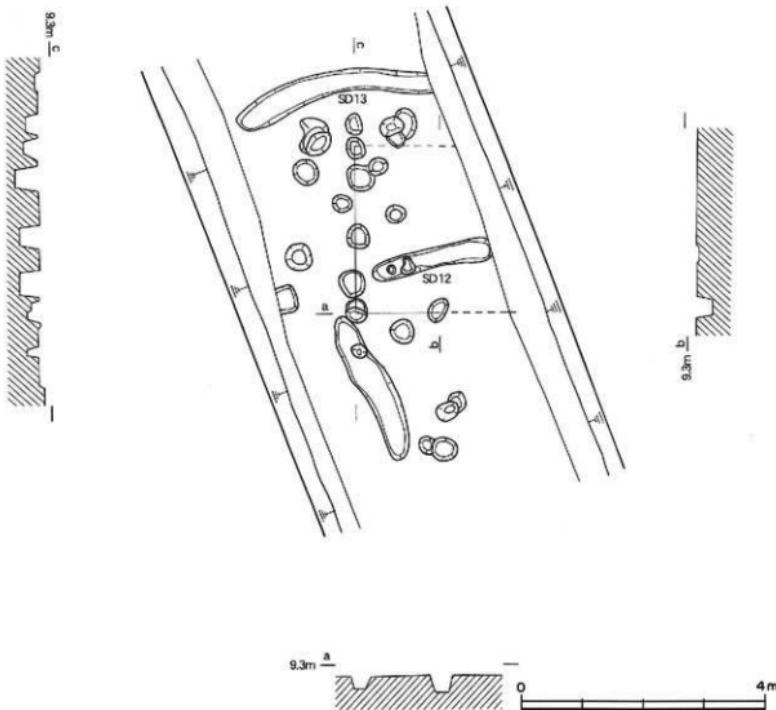


図8 SB04 遺構平面図 ($S = 1/80$)

溝

SD01

調査区南端から中央付近にかけて確認された溝である。全長19.5m、幅60~80cm、深さ5~13cmで南に向かってやや深くなる。SB02周辺で一端途切れるが、北端周辺は耕作による削平をうけ、かろうじて立ち上がりが遺存していた状況であり、本来は連続する溝であったと思われる。その場合、全長約26.5mとなる。埋土は黒褐色土の単層で地山ブロックとφ5mm程の炭化物を少量含む。遺物には3の須恵器瓶口縁部、4の反りのある須恵器壺蓋、5の土師器壺がある。5は胴下半部と思われ、外面にタタキ目が残り、内面はナデによる調整である。

SD 02

調査区南端、西壁寄りに位置する。西側は調査区外に広がるものと思われる。検出された長さ約1.9m、幅約4.0～4.5cmで、深さは約2～3cmと浅い。埋土は単層で、黒褐色土に地山粒を少量含む。遺物は6の有段LJ縁の壺形土器がある。石英粒、橙色粒子をやや多く含み、磨耗している。古墳時代前期の所産と思われる。他に外面ハケメ調整の壺小片がある。流れ込みの可能性がある。

SD 07 (図9)

調査区南寄りのSD 01東側に位置する。南側は明確にはできなかつたがSD 09に切られているものと思われる。全長約3.5m、幅約4.0～5.0cm、深さ約1.0cm前後を測る。北端は約1.2m程突出し、平面L字状を呈しているが、立ち上がりは不明瞭であった。埋土は黒褐色土の単層でしまっている。遺物は溝内から土師器小片が出土している。胎土から奈良・平安時代の所産と思われる。

SD 08 (図9)

SD 07の約7.0cm北に位置し、東側をSD 09、西側をSK 06に切られている。東側は調査区外に延びるものと思われるが、搅乱をうけており不明である。確認された長さ約2.5m、幅約4.0cm前後、深さ約5～10cm前後である。埋土は黒褐色土である。遺物には土師器小片がある。

SD 09 (図9)

SD 07南側からSD 08の北側にかけてコの字状で検出された溝である。南側は東西長さ約1.7m、幅約3.0cm、北側は東西長さ約3.9m、幅約3.5～4.0cmで、途中長さ約6.0cm程途切れている。東側も約2m程溝が途切れブリッジ状を呈している。この部分を含めると一辺約6m程の方形プランとなる可能性があるが東壁付近は近・現代の搅乱をうけており、西側も調査区外に延びるものと考えられ形状、規模等は不明な点が残る。また、この溝に囲まれた地山（遺構検出面）からは少量の遺物が確認された。SD 07東壁付近からSD 09東付近にかけて約2～4cm程の範囲で、灰白色粘質土ブロックと炭化物が飛散している部分が数箇所認められた。遺物には7の須恵器壺、8の土師器壺がある。7は胴下半部と思われ、外面は平行タタキ、内面には同心円の当て具痕が残る。8は上述した灰白色粘質土ブロック周辺で出土した土師器壺である。調整は外面タタキで、内面は当て具痕がハケ状工具で消されている。

SD 11 (図9)

長さ約9.0cm、最大幅約4.0cm、深さ約2.0cmを測る。埋土は黒褐色上で地山ブロックを多く含む。遺物には土師器（壺か）小片がある。さらに北に約5.0cm離れて長さ約1.0m、幅約3.0cmで東にL字状に延びる溝状の遺構がある。

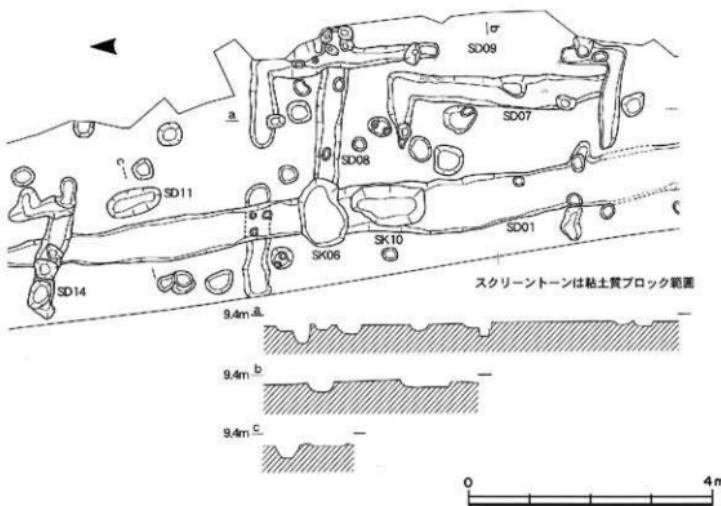


図9 SD 07~09、11、14遺構平面図 ($S = 1/80$)

SD 12

調査区のはば中央、SD 13の南に位置しSB 04と重なる。長さ約1.9mで、幅は西側で約30cm、東側で約40cm、深さ約5cmを測る。東端付近は耕作に伴う擾乱をうけている。埋土は黒褐色土に地山ブロックを少量含む。遺物には9の土師器壺、10の須恵器（壺か）体部下半がある。9は内外面ハケメ及びカキメ調整である。

SD 13

SB 04北に位置し、平面半弧状を呈する溝である。長さ約3m、幅は約30cm、先端付近で約40cm、深さは約10cm前後で、先端付近がやや深くなる。埋土は黒褐色土で、地山ブロックを少量含む。遺物には11の土師器壺がある。ロクロ成形で、口縁部直下に浅い沈線が巡る。SB 04に伴う可能性もある。

SD 14 (図9)

SB 02南に位置し、SD 01を切っている。長さ約1.7m、幅30~40cm、深さ約10cmを測る。溝内に直径30cm、深さ約20~30cmのピットがあるが、SD 14との関係は不明である。遺物は図示していないが溝内から土師器壺片が出土している。

土坑

SK 03 (図10)

調査区南端から約6m付近に位置し、SD 01を切っている。平面はほぼ円形を呈し直径約60cm、深さ約22cmを測る。遺物には土師器があるが小片のため器種、時期等は不明である。

SK 06 (図11)

SD 08西に位置し、SD 08、SD 01を切っている。長さ約76cm、幅約50cm、深さ約10cmである。埋土は暗褐色土である。遺物には土師器(窯か)小片がある。

SK 10 (図11)

SK 06の南側に近接し、長さ約80cm、幅約45cm、深さ8~9cmの楕円形を呈する。埋土は黒褐色土で、SD 01掘削中に確認した。遺物には12の土師器高坏脚部、他に土師器坏蓋がある。

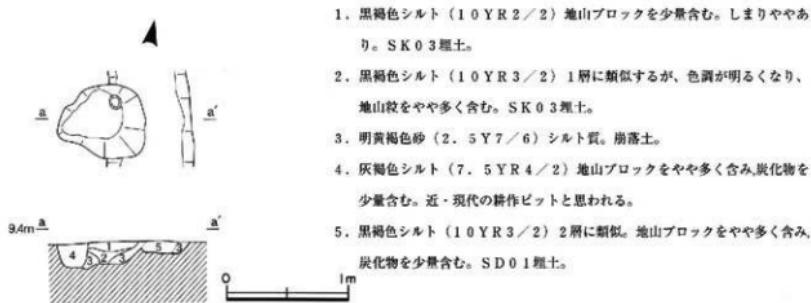


図10 SK 03セクション図 (S = 1/40)

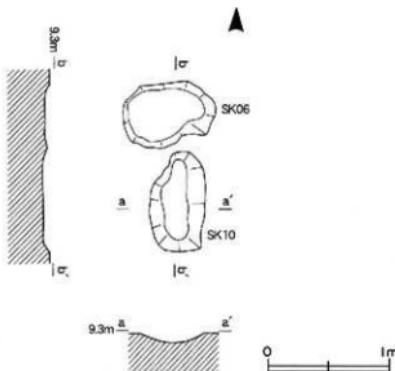


図11 SK 06, 10エレベーション図 (S = 1/40)

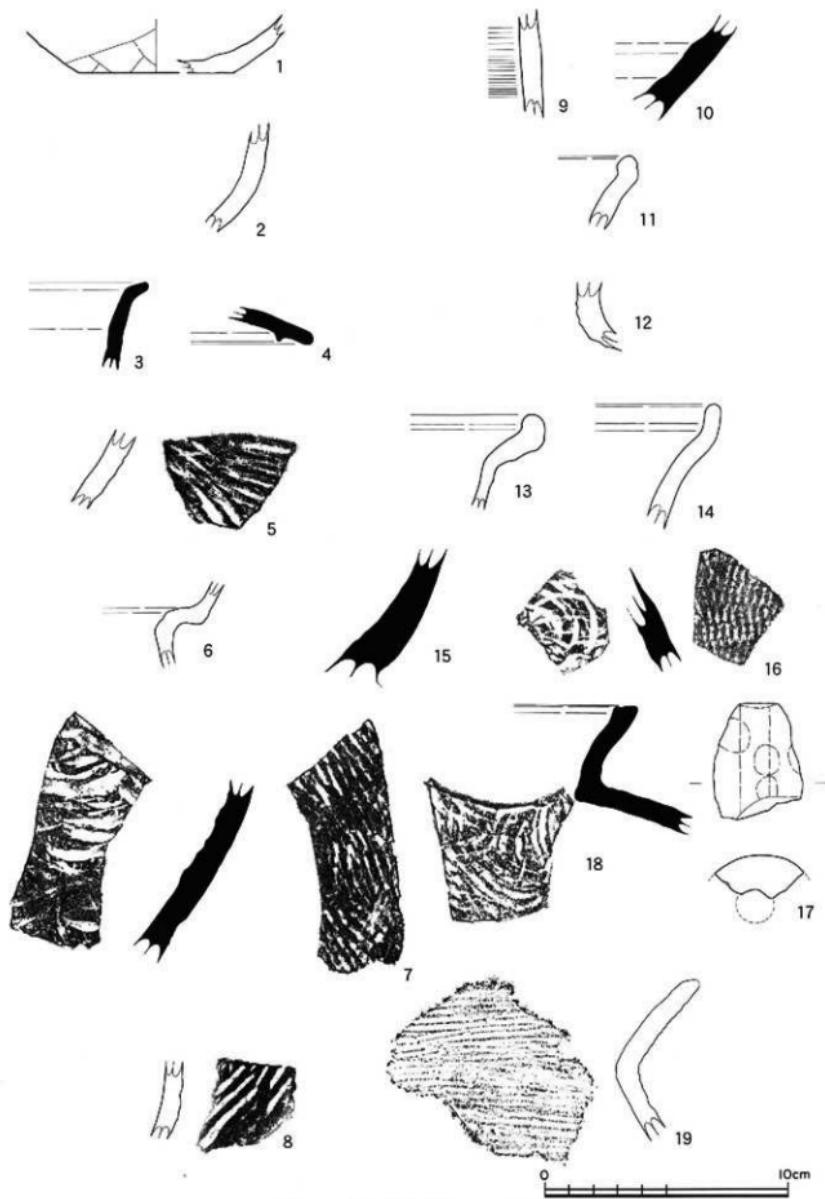


図1-2 遺物実測図 ($S = 1/2$)

3. 遺構外出土の遺物（図12）

遺構外出土遺物として13～19がある。13はロクロ成形の土師器壺と思われる。包含層出土。口縁端部は面取りされている。14はロクロ成形の土師器壺。鍋になる可能性もある。調査区西側の擾乱付近から出土。15は須恵器で高台付壺の体部下半である。包含層出土。16は須恵器壺。外面は格子目タタキ、内面同心円の当て具痕である。包含層出土。17は包含層出土の管状土錐。推定孔径1.3cm。18は調査区に隣接する畑地で表面採集された須恵器壺口縁部である。また、縄文時代の遺物として19の深鉢形土器口縁部がある。調査区南東側のピット状遺構から出土。外面の調整は横位の条痕である。晩期中葉の「中屋式」と思われる。

IV まとめ

1. 壇穴状遺構

当初SD07、09は周溝状に検出されたこと、またSD07東壁付近からSD09東壁にかけて粘土質のブロックが確認されたこと、また溝に囲まれた範囲の遺構検出面から遺構に伴わずに遺物が検出されたことなどから一辺約6m程の壇穴住居跡が耕作等によって床面近くないしは床面まで削平され、壁周溝のみが残されたと考えた。その場合SD09はSD07に囲まれた一辺約3.5m程の壇穴住居跡が東に約0.4m、北に約1.1m程拡張したものとも考えられた。これらが壇穴住居跡の壁周溝と推定すると、SD07東壁付近からSD09東側にかけて観察された灰白色粘土質ブロックはカマドの構築部材の一部とも推定された。壇穴住居跡と考えられる範囲内にはピットが確認されているが、いずれも浅いもので、柱穴と認識できるものではなく、出土遺物もなかった。裁ち割り調査によっても明確に床面と認識できる層位はなく、カマドの掘り方も明確にはできなかった。しかし、柱穴については、該期の壇穴住居跡は大部分が明確な柱穴を有さないものが多く建物構造に何らかの変化があったと考えられている。

またSD09北側に位置するSD11、さらに北にL字状を呈する溝状の遺構があり、主軸方位はややずれるもののSD08と一連のものと考えることもでき、その場合、一辺約5.3mと前述のSD09の規模に近似する。しかし、この範囲内では調査区東側の近・現代の擾乱が激しく、SD07、09で確認された灰白色粘土質ブロックや炭化物、焼土は確認されず、柱穴も確認されなかった。

これらが、壇穴住居跡となれば掘立柱建物との関係や、集落内での位置付けが問題となるが、壇穴住居跡とするには今回の資料だけでは躊躇せざるを得ない。

2. 掘立柱建物

今回の調査で検出された掘立柱建物は調査区の幅が狭いこともあって、その全体の規模を確認できたものはなかった。SB02～04は推定2×2間以上の側柱式建物であったと思われるが、いずれも小規模な建物と推定される。SB01はこれらよりもやや大きく総柱式の建物であったと思われ、いわゆる倉として機能していたと考えられる。確認された4棟の掘立柱建物は主軸方位から東に30～40度振れるSB02、03と東に15度前後振れるSB01、04の2グループに分類することができると

思われる。出土遺物が少ないため詳細は不明であるが、Ⅲ～Ⅳ2期頃が主体になるものと思われる。百塚住吉遺跡が分布する地域では、前代に比較して奈良・平安時代になると新出の遺跡数が飛躍的に増加するという註。それとともに呉羽山丘陵一帯では、須恵器窯跡や鉄生産関連遺跡も増加し、奈良・平安時代になって、大規模な開墾が行われたことを示している。今回の調査で確認された建物もこれらを担う集落の一端に位置付けられるものと思われる。

また、規模、構造等を明らかにできなかったが、SB01、04周辺には比較的規模が大きく深さもやや深い柱穴と考えられるピットがあり、集落を構成する住まいとしての建物の存在が予想される。また、古墳時代前期の土師器も出土していることから同時代の遺構が確認される可能性が高い。

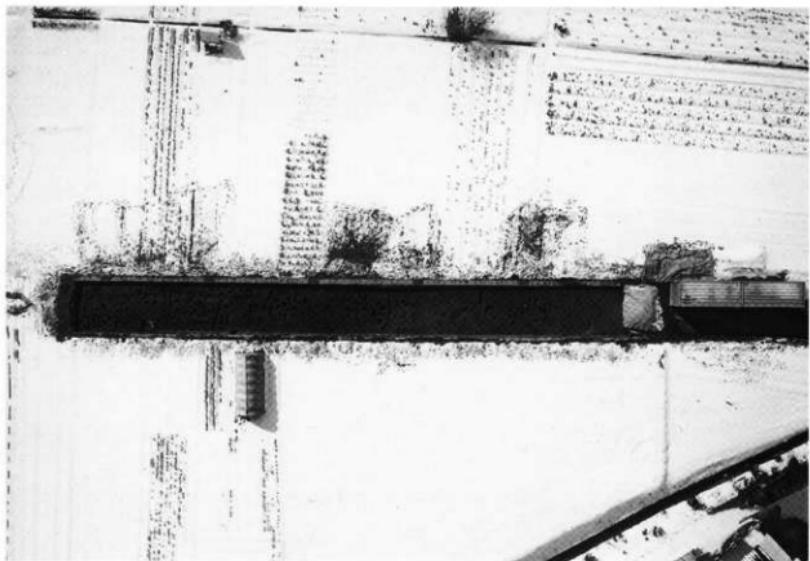
註

武田龍次郎 2000 「砺波・射水平野における遺跡群の展開」『富山考古学研究－紀要第3号』

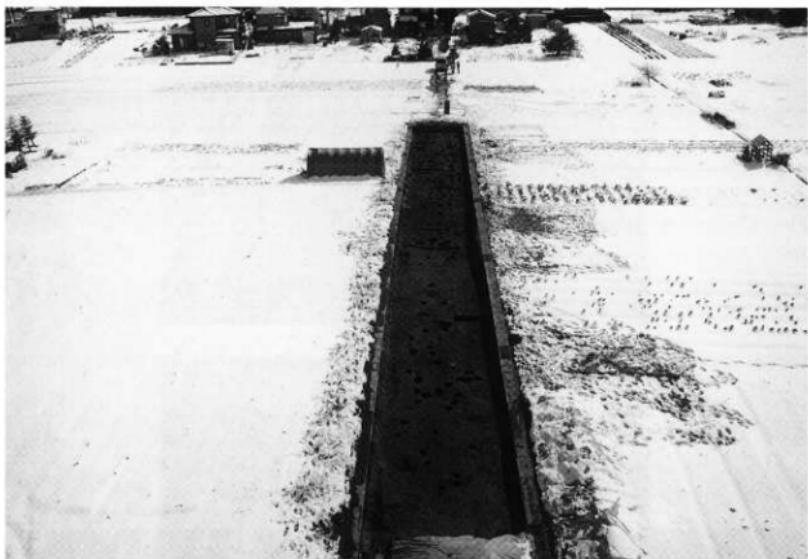
財団法人 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所



百塚住吉遺跡周辺写真（奥に神通川）



調査区全景



調査区近景（手前に S B 0 1）



S D 0 7 ~ 0 9 （西から）



SB 01 (北から)



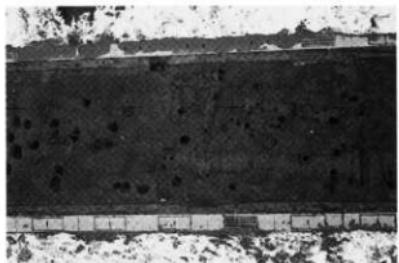
SB 04 (北西から)



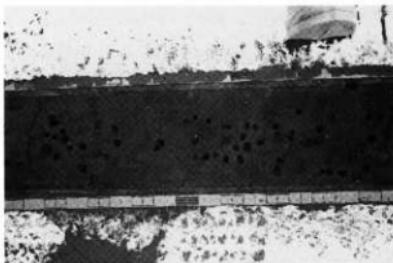
SB 02 (手前にSD 14)



SD 01 (南から)



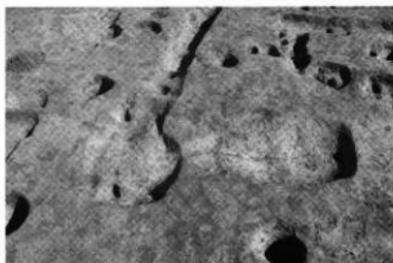
SD 07~09 · SD 14



SB 02 · 04周辺



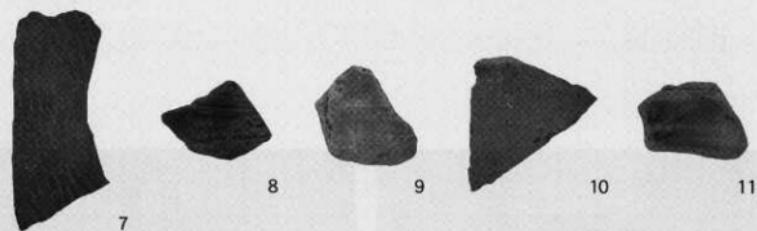
SK 03 土層 (南から)



SK 06 · 10 (西から)



作業風景



報告書抄録

ふりがな	とやましひゃくづかすみよしいせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	富山市百塚住吉遺跡発掘調査報告書						
副書名	市道宮尾6号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
卷次							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	112						
編著者名	小畠直輝						
編集機関	株式会社パスコ						
発行機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター						
所在地	〒930-0803 富山市下新本町5番12号 TEL 076-442-4246						
発行年月日	西暦 2001年 3月 23日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ひゃくづかすみよしいせき 百塚住吉遺跡	とやましみやお 富山市宮尾	16201 187	36度 43分 10秒	137度 12分 20秒	20010110 ～ 20010219	268	市道宮尾6号線道路 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
百塚住吉遺跡	集落跡	縄文 古墳 奈良・平安	なし なし 掘立柱建物・ 土坑・溝	縄文土器 土師器 須恵器、土師器			

富山市埋蔵文化財調査報告112

富山市百塚住吉遺跡発掘調査報告書

－市道宮尾6号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2001年（平成13年）3月23日発行

発 行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

〒930-0803

富山市下新本町5番12号

T E L 076-442-4246

F A X 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp

編 集 株式会社バスコ

〒461-0025

名古屋市東区徳川1-15-30 リザンビル

T E L 052-937-6627

F A X 052-937-4434

印 刷 株式会社 名高社

